

2022年10月16日 礼拝説教要旨
詩編講解説教124「わたしたちの助け」
詩編124：1～8、ローマ8：31～34

詩編第124編はわたしたちにとって馴染みのある詩編です。わたしたちの教会では礼拝への招きの言葉として124編8節「わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある」を用いています。これは宗教改革者のカルヴァンが、彼が牧会しておりましたジュネーヴやストラスブールの教会の礼拝式文で用いていたものでそれに倣っております。多くの改革派の伝統にある教会がおそらくこれを礼拝招詞として用いているでしょう。どうしてこの御言葉が礼拝への招きとして用いられるのでしょうか。

巡礼者たちは、エルサレムでの礼拝を目指して険しい旅路をはるばるやってきます。実はこの124編には礼拝の要素がいくつか認められます。例えば、1節に「イスラエルよ、言え」とあります。この「言え」は唱和することです。口を揃えて言うこと。わたしたちも礼拝の中で使徒信条や主の祈り、交読文などを唱和します。唱和することで信仰を一つに、心一つにします。また6節の「主をたたえよ」神さまの救いの御業を喜び、ほめたたえること。賛美もわたしたちの礼拝では欠かせない要素です。最後の8節「わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある」これは信仰告白です。巡礼者たちは礼拝で共に言葉を唱和し、神さまをほめたたえ、信仰を言い表しました。ですからこの124編には巡礼者たちの行った礼拝そのものが表されていると考えてよいでしょう。もちろんそれは今日のわたしたちの礼拝にも通じています。カルヴァンが礼拝の招きとしてこの詩編を用いる理由もそこにあります。

冒頭で「主がわたしたちの味方でなかったなら」と繰り返されます。これは「もし〜でなければ」といった仮定です。もし神さまがおられなければ、自分たちはどうなっていたらうか。御言葉にあるように、敵意の炎に呑み込まれ、大水が押し流して、自分たちは滅んでいたに違いない。皆さんはそういうことを考えたことがあるでしょうか。2節の「逆らう者」は原文では「アダム」（人間）という言葉です。そこには人間の支配があり、その人間を支配している罪の支配があります。罪の支配は「怒り」であり、また5節にある「驕り高ぶり」です。もし神さまがおられなければ、そういうものに呑み込まれてしまうのです。

誰もが経験があると思いますが、人間は簡単に怒りに支配されます。ここには「敵意の炎」とありますが、火は時に制御不能になります。つまり怒りが抑えられないということ。怒りがやがて憎しみに変わり増大していきます。創世記のカインとアベルの物語でも自分の献げ物が神さまに顧みられなかったカインは「激しく怒って顔を伏せた」（創世記4：5）とあります。そして弟のアベルを殺してしまふ。怒りに呑み込まれた人間の罪の姿です。ロシアの始めた戦争も人間が身勝手な正義を振りかざし、怒りをコントロールできなかった結果として起こります。同時にそこには「驕り高ぶり」もあります。相手を支配できるという驕りが怒りに拍車をかけます。世の中はこのような怒り、驕り高ぶりで満ちているのではないのでしょうか。

「そのとき、大水がわたしたちを押し流し、激流がわたしたちを越えて行ったであろう。そのとき、わたしたちを越えて行ったであろう。驕り高ぶる大水が」（4～5節）ここに「大水」とありますが、これは旧約聖書では「混沌」を意味します。天地創造の前の混沌です。「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」（創世記1：2）それは罪に呑

み込まれ支配された混沌です。もし神さまがおられなければ、世界はこの混沌のままです。罪に支配され、怒りに呑み込まれたままなのです。それは考えただけでも恐ろしいことでしょう。

しかし神さまはこの大水、混沌からわたしたちを救い出してください。「主をたたえよ。主はわたしたちを敵の餌食になさらなかった。仕掛けられた網から逃れる鳥のように、わたしたちの魂は逃れ出た。網は破られ、わたしたちは逃れ出た」(6～7節) この救いはイスラエルの人々にとっては実際に経験してきたことでありました。出エジプトの出来事を思い出します。それこそイスラエルは葦の海を渡り、大水から逃れ出ました。それだけではありません。この詩編の背景にもバビロニア捕囚の影響がありますが、かつてエルサレムを陥落させたバビロニア軍は「北からの水」(エレミヤ47:2)と呼ばれました。そして実際にバビロニアに支配され呑み込まれてしまいました。また捕囚から帰還した後も、ペルシャやローマと言った強国の脅威に絶えず翻弄され続けていくのです。

しかしこの弱小の民であるイスラエルはそれでも歴史の中で存続し続けました。むしろ強国であったアッシリアもバビロニアもペルシャも滅びました。でもイスラエルはこの歴史を耐えたのです。その理由は何でしょうか。それはこの天地万物を造られ、地上の歴史を導かれる神さまが共におられるからに他なりません。そのことを最後にこの詩人は告白いたします。「わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある」(8節) 強大な罪の力に押し流されてしまいそうになっても、天地を造られた神さまが共におられるなら、その神さまが味方であるなら、わたしたちは大丈夫だと。どんなに脅威を感じるがあっても、それは所詮人間の業であり、いずれ朽ちゆくものなのです。わたしたちにはすべてを支配し凌駕される神さまがおられる。ローマの信徒への手紙にも「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」(ローマ8:31)とあります。

天地創造のはじめに、「光あれ」と、この罪の闇、混沌を打ち破られた神さまが共におられることがわたしたちの唯一の助けです。そこに希望があります。そして神さまはいよいよこの罪の闇に打ち勝つまことの光、イエス・キリストをこの世にお遣わしになりました。「光あれ」とこの世界を始められた神さまは、まことの光であるキリストによって、この天地創造の御業を完成されます。キリストの十字架とよみがえりによって、わたしたちはすべての罪の支配から解放され、本来わたしたちが生きるべき神さまと共にある健やかな命を取り戻すことができるのです。そのように最後まで、完成まで責任をもってわたしたちの助けとなっていてください。そこに神さまの歴史に対する愛と憐れみがあります。

生きていけば様々な困難があります。もうだめだと感じることもあるでしょう。けれどもこの天地をお造りになられた神さまが共におられ、常に味方でいてくださるなら恐れることはありません。礼拝で「わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある」と告白するときに、わたしたちはそのような心強さに生きることができるでしょう。その救いの確信を得ることが困難なこの世の旅路を生きる巡礼者にはどうしても必要なのです。わたしたちが礼拝でこの詩編を告白することの意味はそこにあります。